

法政大学多摩キャンパスにおけるトレーナー活動(1)

IZUMI, Shigeki / 泉, 重樹

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

29

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

2011-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007165>

法政大学多摩キャンパスにおけるトレーナー活動 1

An Athletic Trainer's Activity in Tama Campus of Hosei University Part.1

泉 重 樹 (スポーツ健康学部)
Izumi Shigeki, Faculty of Sports & Health Studies

I. 緒言

2009年に開設されたスポーツ健康学部は、法政大学における体育系学部であり、現在2期生までが学んでいる。2010年度より、2年生である1期生はヘルスデザインコース、スポーツビジネスコース、スポーツコーチングコースの3コースに分かれ、各々のコースで勉学に励んでいる。同時に2年時より全専任教員のもとで各ゼミに所属し(必修ではないものの95%以上が所属)、少人数制の演習形式の授業において各教員の専門分野を学んでいる。

筆者の専門はスポーツ医学およびアスレティックトレーニングであり、筆者自身は日本体育協会公認アスレティックトレーナー(以下日体協公認AT)でもある。筆者のゼミでは主にアスレティックトレーナーを目指す学生を受け入れ、ゼミにおける教育や発表・実習を経て学生時代に(学生)トレーナーとして活動をするを通して、将来の自身のキャリアについて考えてほしいと願っている。さらに「アスレティックトレーナー」という目を通して、今後の日本のスポーツの在り方や方向性等について考えを深め、卒業研究を通して形にした上で社会に羽ばたいてもらいたい。このアスレティックトレーナー教育において重要な位置を占めるのは「スポーツ現場実習」である。しかしながらアスレティックトレーナー教育が始まったばかりの本学部内だけでは、実習場所として不十分である。また本学に37部ある体育会についても、実習先としてすべての体育会に対してお願いするのは3キャンパス間の移動問題等もあり、今後の課題である。そこで現場実習を行うための準備として、多摩体育館におけるトレーナー室において外部委託しているストレングスコーチおよびアスレティックトレーナーとともに、筆者自身が活動することとした。

本報告の目的は法政大学多摩キャンパス(多摩体育館)における体育会のトレーナー室利用状況を把握すること、およびアスレティックトレーナーおよびストレングスコーチとしての取り組みの方向性探り、今後のアスレティックトレーナー教育における現場実習の基礎資料とすることとした。

II. 方法

1. 方針

大学のトレーナー室という性格上、教育に重点を置いたセ

ルフコンディショニングもしくはトレーニングに対するアドバイスという点に重点を置いている。その一方で筆者自身が鍼灸マッサージ師であることもあり、各選手を評価した上で、必要と判断した場合には鍼治療およびマッサージ治療を行っている。

2. 対象と期間・実施方法

活動集計の対象は2010年3月から10月までに多摩体育館トレーナー室を訪れ、筆者が相談・評価および処置を担当した対象者(学生選手)とした。対象者に対して、まず問診さらに評価を行い、その結果から、口頭によるアドバイスおよび運動(リハビリ/トレーニング)指導、ストレッチング指導、鍼治療、マッサージ等を行った。ストレッチングについては必ずパートナーストレッチにより自身の筋が伸びているという感覚を得られるよう指導を行い、その後具体的なセルフストレッチングを指導することとした。

3. 集計方法

実際に何らかの処置をした対象者をカルテに記録した上で、集計は後ろ向きに行った。集計は開設日数と来所した対象者の人数、競技(部活動)名、対象者の症状を持つ部位名とその症状、筆者が実際に行った処置ごとに行った。部位・症状や処置が複数ある者は、その部位・症状・処置ごとに一件として集計を行った。集計はすべて延べ人数とした。

III. 結果

1. 開設日数と人数

開設日時と時間は、2010年3月12日から10月8日までの計17日、時間は15時から18時まで(前期)と17時から19時30分(後期)であった。対象者数は38名(男性32名、女性6名)であった(図2)。1日平均2.2人であった。

2. 競技(部活動)名

利用のあった競技(部活動)名は多い順に、バドミントン、陸上(長距離)、準硬式野球、陸上(短距離・跳躍)、ラグビー、スキー、水泳、テニスであった(表1)。

3. 部位・症状

相談のあった部位は、膝が最も多く13人(30%)を占めて

いた。以下、大腿後面、足関節、腰部、肩、下腿と続き、部位別にみると腰下肢の症状を持つものが多かった（表2）。また対象者の訴えていた症状は疼痛が最も多く、23人（51%）であり、次いで違和感やだるさが12人（27%）、痛みやだるさ等はないが、外傷・障害からの復帰を希望し、リハビリテーションの具体的な方法を希望する者やトレーニングの具体的なアドバイスを求める者が10人（22%）であった（図2）。

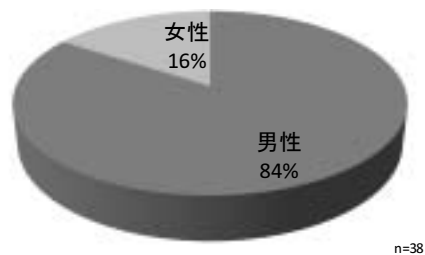


図1 利用者の男女比

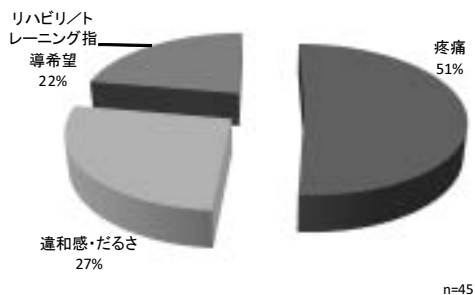


図2 対象者の症状

表1 利用者の競技（部活動）名

	人数	割合
バドミントン	8	21%
陸上（長距離）	7	19%
準硬式野球	7	18%
陸上（短距離・跳躍）	5	13%
ラグビー	5	13%
スキー	3	8%
水泳	2	5%
テニス	1	3%

表2 外傷・障害部位の割合

n=44

	人数	割合
膝	13	30%
大腿後面	8	18%
足関節	7	16%
腰部	5	11%
肩	4	9%
下腿	3	7%
股関節	2	5%
手関節	1	2%
足部	1	2%

4. 処置

来所し、問診・評価の結果、実際に行った処置としては、鍼施術が最も多く19人（34%）であった。ついでマッサージとストレッチングがいずれも11人（19%）、さらにリハビリテーションメニューの処方もしくはトレーニングに関わる動作の評価およびトレーニングの処方が9名（17%）、テーピングが7名（12%）であった。

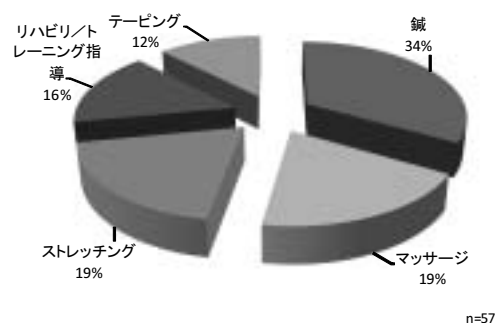


図3 行った処置の内容

IV. 考察

1. 多摩キャンパスにおけるトレーナー室の利用状況

2010年度に実施した多摩体育館トレーナー室における日体協AT資格を持つ教員（筆者）によるアスレティックトレーナー活動報告を行った。結果、開設日あたりの利用者数は2.2人と少なかった。その一方、利用体育会部活動数は7つであり、多摩キャンパスで展開している部活動数（10部）からみると過半数以上の体育会が利用していたことは今後に向けて明るい材料であった。

学生トレーナー教育の草分け的存在である国際武道大学の山本は、大学内におけるトレーナー育成システムは、トレーナーを育成するために構築したのではなく、学内のスポーツ

選手の医科学サポートを遂行するためのマンパワーとして学生トレーナーの存在が不可欠であったために必然的に生まれたとしている¹。2010年度、本学における活動にあたりトレーナー活動に際して各部に対する働きかけなどの事前の活動をしてこなかったことと、トレーナー活動自体の学内での認知不足は否めない。しかしながら本学のトレーナー教員一人のマンパワーでは明らかに限界があることが明らかとなったとともに、本学における学生トレーナー教育も学内におけるスポーツ医科学サポートの充実のためにマンパワーの充実が不可欠であることが確認できた。

2. 大学トレーナー室の在り方について

将来、アスレティックトレーナーとして自立を目指す学生トレーナーとして学ぶものとして、外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、測定と評価、コンディショニング、アスレティックリハビリテーション（リコンディショニング）、トレーナー（スポーツ）組織の運営、教育などがあげられる²。これらを実践的に学べ、体験できる場が現場実習である。なかでも大学におけるトレーナー室で実際に学生トレーナー自身が体験できるのは、評価と測定、コンディショニング、リコンディショニング、組織運営、そしてこれらを通した選手教育であろう。現在、本学では3キャンパスのトレーニングセンターの管理を外部業者に委託して運営している。この形態のメリットは各キャンパスにプロのアスレティックトレーナーおよびストレングスコーチが配置されていることで、安全にトレーニング（およびリハビリテーション）が行える点にある。しかし外部委託している業者はプロフェッショナルなスタッフを派遣する一方で、資金面の制約から必要最小限の人数しか各施設に配備できないため、現場における各選手への指導（教育）よりも、現場において選手に安全かつ効率よくトレーニングを実施してもらうという、トレーニングルームの管理と運営が活動のメインとなっている。今後、この外部委託しているプロのアスレティックトレーナーやストレングスコーチに、学生トレーナー活動に指導的な立場で積極的に参加してもらうことで、文字通りの学生トレーナー教育だけでなく、トレーニングセンターを利用する選手教育の面からコンディショニングおよびリコンディショニング能力の向上に関わってもらうことが可能になると考える。

3. 今後の課題

2011年度から始まるスポーツ健康学部の日体協公認ATカリキュラムにおける現場実習において、筆者は多摩体育館トレーナールームを中心的な存在にしたいと考えている。学生トレーナーチームの運営における重要事項として、先行事例では学内の各運動部との連携、および医師を中心とした学内のスポーツ医科学システムの構築を掲げている³。この点は本学にもあてはまると考えている。多摩キャンパスにおける体育会活動の存在価値を高めるためにも、今後は多摩キャン

パスにおける医師（である教員）を中心としたスポーツ医科学システムの構築が重要な課題になると考える。

V. 結語

2010年度に開始したトレーナー教員の活動から、今後の学生トレーナー教育の方向性と今後の課題を論じた。今後の一番の期待は現場実習を通してトレーナーを目指す学生トレーナー達が育ってくることにある。このマンパワーを上手に活用することにより、法政大学における新しい形のスポーツ医科学サポートシステムの構築に努力していきたい。

VI. 文献

1. 山本利春：国際武道大学におけるアスレティックトレーナー教育. 国武大紀要, 20, 63-73, 2004
2. 日本体育協会編：日本体育協会公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割. 日本体育協会, 東京, 第1版, 2007
3. 泉重樹, 倉持梨恵子, 久米秀作, 清水貴司, 近藤宏, 和田恒彦, 雨宮輝也：帝京平成大学における学生トレーナー活動の現状と課題, 帝京平成大学紀要, 19, 149-159, 2007